

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19720168
 研究課題名 (和文) 日本古代のモニュメント空間分析による地域社会と歴史認識の形成過程に関する研究
 研究課題名 (英文) Research of the formation of the regional society and the perception of history by analyzing the monument space of Japanese ancient times
 研究代表者
 松下 正和 (MATSUSHITA MASAKAZU)
 神戸大学・大学院人文学研究科・特命講師
 研究者番号：70379329

研究成果の概要 (和文)：『播磨国風土記』『日本書紀』などの古代文献にみえる記念碑としての古墳を主な研究対象とし、古墳にまつわる伝承が記録化・視角化されるモニュメント空間を分析することで、地域社会の人々と史跡の関係についての歴史や、国家・王権と地域の人々が史跡に対して持つ認識の差について解明をおこなった。

研究成果の概要 (英文)：

By analyzing the monument space that appeared in an ancient document, I clarified the history of the relation between people and the historic site of the regional society. Moreover, the difference of the recognition of the historic site between regions and the nation were clarified.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	240,000	1,840,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：モニュメント空間・墳墓・記念碑

1. 研究開始当初の背景

代表者の専門である歴史学の分野において、記念碑の問題は、90年代以降特に「史跡論」や「文化財論」として主に近世史や近現代史の分野で研究の蓄積が高まりつつある。たとえば、羽賀祥二『史蹟論 19世紀日本の地域社会と歴史意識』（名古屋大学出版会、1998年）、鈴木良、高木博志編『文化財と近代日本』（山川出版社、2002年）、若尾祐司・

羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史 史誌・記念碑・郷土』（名古屋大学出版会、2005年）等があり、近世から近現代社会における史跡や文化財についての意義を国家と地域社会の双方から解明するという重要な視点を提供している。近世・近代における、古代の歴史的遺蹟や遺物としての石碑、地域の歴史観に対して、人と歴史についての文化史的な観点から検討が加えられている。その結果、

史蹟を中核とした社会空間のあり方や、人間と史蹟との関係史、その間に発生する歴史意識・歴史像について明らかにされている。古代史蹟に関する問題群は常に重要な研究課題となっている。

かかる地域社会における古代史蹟が果たす役割については、歴史学以外でも注目されてきた。金石文研究としては、藤原貞幹『金石遺文』(享保17～寛政9年<1793～97>)、松平定信『集古十種』(寛政12年)、狩谷掖斎『古京遺文』(安永4～天保6年<1755～1835>)などにより、近世以来逸文収集の伝統がある。近年では、那須国造碑などの現存の古代石碑を対象とした、東野治之・平川南『よみがえる古代の碑』(歴史民俗博物館振興会、1999年)など90年代以降、素材と地域に密着した注目すべき研究が現れており、継承すべき点が多々ある。ただ、墳墓に関する考古学の研究においては、古墳の造営時における地域認識の問題を正面から取り上げることはない。また、古代祭祀論における社の研究においては、近年の個別祭祀・儀礼ごとに細分化した現状において、宮廷神話との関わりや、国家・王権による統合装置としての役割には注目されるものの(岡田精司『古代王権の祭祀と神話』塙書房、1970年)、地域社会における社の独自の役割については、各国の風土記研究や各自治体史などで個別に言及されるのにとどまっている。その点国文学における風土記・万葉集研究のほうが、かえって逐条解釈が進展している(風土記研究会編『風土記研究』など)。ただ「地名説明」論による解釈では伝承の差異を生み出す民衆・豪族・王権間の背景まで分析されない憾みがある。歴史地理学とモニュメント空間研究との接点としては、古代の古環境復元などの分析手法があげられるが、ようやく研究の緒についたばかりであるといえよう(日下雅義編『古代の環境と考古学』古今書院、1995年)、『新しい歴史学のために』259号「特集環境史の現在」(2005年)など。

しかし古代史の分野では、上記のような隣接分野における記念碑としての古代史蹟研究が進展しているにもかかわらず、全体としては、神・王・地域の開発者・ウヂの祖先たちの事績を顕彰した史蹟が、当時地域の人々によりどのように認識・記憶・記録化されたのか、また実際に、“記念碑”としての墳墓・墓誌・石碑・社がいかんして視覚化され、モニュメント空間が形成・再生産されていくのかという分析視角はほとんどない。古代における雄略朝の画期性を検証した、小林敏男「古代国家における雄略朝の位置」(『歴史評論』514、1993年)らの研究を除けば、古代の各時期において、いかなる史蹟が「発見」され意味を付与されていくのかについて、自覚的に研究したものはない。その結果、古代

史において史蹟や史蹟にまつわる伝承の発生・記録化・記憶化・視覚化されるプロセスを、王権と地域社会の相克から位置づけるといふ研究も不十分なものとなっている。

2. 研究の目的

そこで本研究の目的は、
(1)記紀や風土記、万葉集などの古代史料中の地名説話や祖先伝承に登場する様々な史蹟(墳墓や社など)や遺物としての金石文(石碑・墓誌)など——古代の人々により造営・建立された“記念碑”——を素材として、実物としての記念碑が存在する“場”や、語り継がれた伝承が視覚化された“場”をモニュメント空間ととらえ、
(2)そのモニュメント空間が、いかんして発生し、記録化・口承化・視覚化されるのかを、奈良時代前後の地域社会や権力構造との関わりにおいて形成・再生産(場合によっては破壊・忘却)される過程を歴史的に解明し、古代の人々が有する歴史認識に対していかなる影響を与えたのか、を検討することとした。

3. 研究の方法

これまで代表者は、古代氏族の系譜や祖先伝承などを利用して、ウヂの構成員がもつ規範(仕奉意識)について分析し、ウヂの門流や、古代の君臣関係のありようについても研究を重ねている。その結果、古代の君臣関係が「祖一子」関係として永遠に維持すべきものとして称揚され、その現実的な担保となるのが天皇による「家門(いへかど)」の保証であったことを明らかにした。

このような王権からの意識付けとは別に、古代のウヂの側で、また彼らの基盤としての在地社会の中でどのように「家門」を維持されていくのかを、播磨における白国氏の古系譜を素材に、古代の佐伯氏や中世の白国氏の「家門」維持規範について検討を行ってきた。その結果、規範の維持には、祖先伝承だけではなく、伝承や祖先の事績が視覚化・意味付与された墳墓や社など、ウヂ構成員にとっての“記念碑”が持つ意義が大きいことが明らかとなってきた。

一方、代表者は播磨や丹波の地域史も手がけており、『播磨新宮町史料編I』や『加西市史料編2』の執筆に際し、『播磨国風土記』の分析を行った。その結果、現存の5つの風土記中、播磨が最も墳墓に関する記載が多く、民衆から豪族層までの様々なレベルで墳墓伝承が生成されていくプロセスを明らかにすることができると考えた。また、神戸市にある陵墓参考地・玉津陵(吉田王塚古墳)の指定経緯や、丹波市青垣町にある神楽川板碑を用いて、近世から近現代における地域住民による伝承の記録化と視覚化のあり

方について検討を行った。これらの研究を通じて、当該期の王権・幕府・藩・国家の評価とは別の次元において、墳墓や板碑を媒介に記憶が記録化・視覚化され、史蹟と伝承が織りなすモニュメント空間が後の時代にも地域住民により再発見・保全・崇拜の対象とされていることに気づいた。これら古代史蹟が地域のアイデンティファイに関わって住民に意識され、またその伝承についても再生産されていることをふまえ、古代でも同様の事例を検証してみたいと考えた。

上記のような研究蓄積と問題意識をもとにしつつ、

(1)申請者が行ってきた地域史研究のフィールドが、主に播磨・丹波・摂津であること、
(2)全国で16万基あまりの古墳が確認されているが(平成13年3月末段階)、そのうち兵庫県内の古墳数は第1位(16,577基)であり、全国の古墳の約1割が兵庫県内に集中しており、墳墓伝承と対応する実在の古墳と対応させやすいこと、

(3)里や村レベルの古代地域社会の実情を知る上で貴重かつほぼ唯一の資料である風土記が播磨に残されており、現存風土記中最も「墓」に関する伝承が多いこと(8件)、

(4)万葉集にも、西求女塚古墳・処女塚古墳・東求女塚古墳(旧摂津国)と処女塚伝承との対応や、敏馬浦(旧摂津国)を詠う歌に見られるように、西摂津地域には実在する史蹟と対応するモニュメントを詠う歌が数多く残されていること、

(5)播磨・摂津地域における「王の事績」が、記紀神話にも数多く記載され、「赤石山陵」(五色塚古墳)の墳墓伝承や生田社をめぐる神功皇后伝承など、現在のフィールドと関連づけてモニュメント空間を検証しうること、
(6)研究期間が最大で3年に限られていること

などの理由から、研究対象を申請者の研究蓄積がある播磨と西摂津地域における、記念碑としての古代墳墓に限定して研究をおこなった。またそれらの墳墓にまつわる伝承が記録化・視覚化されるモニュメント空間を当該地域との関わりにおいて検討し、ひいては人と史蹟の関係史を通じた古代地域社会や、国家・王権と在地の人々との間で差異と緊張関係を含みつつ生起する歴史認識の特質を解明することを本研究の課題とした。

4. 研究成果

(1) <平成19年度>

本研究は、古代の人々により造営・建立された“記念碑”が実際に存在する”場”や、“記念碑”をめぐる伝承が視覚化された”場”をモニュメント空間ととらえ、その空間の形成・再生産過程を歴史的に解明することを目的とする。

したがって、初年度では、

①古代文献にみえる“記念碑”史料を収集した。

②主に『播磨国風土記』にみえる地名説話や祖先伝承に登場する墳墓を中心とした史蹟を素材として、そのモニュメント空間の形成過程を、氏族による墳墓祭祀と系譜継承儀礼の側面から検討した。

③モニュメント空間の再形成過程を検討するため、近世における古代史蹟の伝承形態のありように関する研究会「史跡・モニュメント研究の最前線～近世に生きる“古代”～」を、平成19年12月16日に開催し、研究代表者を含め計3名が研究報告を行った。

④ミヤケのモニュメント性に着目し、針間国造・但馬国造に関する伝承研究を行った。その際には、県政資料館において粟鹿神社文書を調査し(平成19年8月23日)、播磨と但馬の境界領域に位置する「生野」地域のフィールドワークを行った(平成20年2月23日)。

これらの研究により、モニュメント空間を検討するための基礎的な史料の収集が終了し、モニュメント空間の形成と再形成についての基本的な分析視角を得ることができた。なお、これらの研究成果については、但馬史研究会において『播磨国風土記』から見る古代の但馬」と題して報告を行い、『但馬史研究』誌上に「<外部>からみた但馬・<外部>にある但馬～古代の播但交通と飾磨・越部ミヤケ～」として投稿し掲載された。

(2) <平成20年度>

モニュメント空間が、古代の地域社会や権力構造との関わりにおいて形成・再生産・忘却される過程を歴史的に解明し、当該期の人々が有する歴史認識・地域認識に対していかなる影響を与えたのかを検討するため、以下のような研究を行った。

①『播磨国風土記』・『摂津国風土記逸文』中の墳墓伝承地に関するフィールドワークと古代から現代にまで至る関連史料を収集・分析し、摂播におけるモニュメント空間研究を行った。

②「いひぼ学研究会」に出席し現地研究者やたつの市教委から情報収集を行った。

③日本三古碑の一つ「多賀城碑」のフィールドワークと関連史料の収集・分析し、古代東国と摂津・播磨のモニュメント空間に関する比較検討を行った。

④『常陸国風土記』と『播磨国風土記』にみえるモニュメントの比較検討のため、第2回モニュメント研究会「『播磨国風土記』にみえるモニュメント」を平成20年12月14日に開催し、研究代表者を含めて計4名が報告した。

これらの研究により、モニュメント空間の形成・変容過程に関する基本的な分析視角を得ることができた。また、西摂・播磨地域の

特異性を浮き彫りにすべく、東国との比較研究を行い、モニュメント空間を媒介として成立する歴史認識の地域差を解明することができた。

近世・近現代以降に文化財化される以前の地域の人々と史蹟との関係を把握するための歴史的な前提を解明し、モニュメント空間における、地域社会で生じた歴史意識・地域認識と、王権や国家により「正統」化される歴史意識・地域認識との相克状況を分析することは、王権の歴史意識・地域認識に関する研究にとっても大きな意義を有することが明らかとなった点が今年度の成果である。

(3) <平成 21 年度>

昨年度の分析結果をふまえ、下記の視点から「モニュメント空間」の形成・変容・死滅過程の研究を行い、その場を媒介として成立する地域の歴史認識や、王権の地域認識が多層的に重層し、相克する状況を明らかにする予定であった。しかし、研究代表者である松下が、別の科研の研究経費（科学研究費補助金・基盤研究（S）（H21～H25）「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」（研究代表者＝奥村弘・神戸大学大学院人文学研究科教授）により平成 21 年 7 月から「特命講師」として雇用されることとなり、したがって、同年 6 月末日にて研究を終了せざるをえない旨、神戸大学の研究推進課より通知があった。遺憾ながら、科研経費を用いた研究は中断することとなった。但し、古代モニュメント研究自体は今後も継続していく予定である。なお、今年度の研究計画は下記の通りであった。

① モニュメント空間形成過程の研究：既存の墳墓などの構築物が伝承とリンクすることにより、さらに史蹟として、当該期の地域の人々に認識される過程を復元する。具体的には、前述の風土記中の史蹟がモニュメントとして地域住民に認識され、地名説話として定着し、場合によっては中央により改変される過程を検討する。他にも、『万葉集』にみられる処女塚伝承の発生・展開過程の分析と、西求女塚古墳・処女塚古墳・東求女塚古墳などの立地条件を勘案しながら、西摂から東播にかけての沿岸部に頻出する墳墓伝承の意義を考察する。従来の関口裕子『処女墓伝説歌考』（吉川弘文館、1996 年）による解釈では、兎原処女をめぐる男同士の争いを説明できたとしても何故西摂にある古墳になぞらえて伝承が展開するのかを十分に説明することができない。やはり、墳墓にまつわる伝承が集中的に存在することの意味は、東アジア世界との交通の結節点かつ古代瀬戸内交通の要衝の地であり、かつ畿内と畿外との境界領域に位置するという立地条件を考慮に入れる必要がある。このように、モニュメント空間研究をすすめる際には、史蹟と伝承を

とりまく「場」の特異性に着目する。

② モニュメント空間の変容過程の研究：この空間においては、伝承が記録化ないしは口承化される過程において、伝承自体とまたそれを基礎とする在地勢力と王権との関係へも影響をあたえる。その結果、地域の人々もつ地域観や歴史観がどのように変容するのかを、中央との関わりにおいて分析する。従来の伝承研究・神話研究では王権へ収束する点のみが着目されてきたが、本研究では、在地の語りと王権の語りがか錯綜する多元的状况を想定し、その歴史的展開について考察する。場合によっては、その空間の破壊・死滅についても検討を加える。

③ モニュメント空間を媒介として成立する地域の歴史認識の研究：西摂・播磨地域の特異性にも着目しつつ、地域から見た歴史認識の研究を行う。その際には、従来の記紀分析を中心にして得られた歴史認識や王権の語りとの差異に留意し、また風土記（やその逸文）が現存する他地域（常陸・豊後・肥前・出雲）とのモニュメント空間との比較史的な分析も可能な限り行い、西摂・播磨地域の独自性を浮き彫りにする。またモニュメント空間分析モデルの普遍性を検証することとする。

また、最終年度である今年度では、報告書の作成とともに論文化や地域連携センターの HP へのアップを行うことで、研究成果の公開に努める予定であったが、先に述べた事情により研究を中断せざるをえなくなったため、研究成果報告書の作成などによって研究成果の公開にかえた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 松下正和、<外部>から見た但馬・<外部>にある但馬—古代の播但交通と飾磨・越部ミヤケ—、但馬史研究、査読無、31 号、2008、pp. 1-22、

〔学会発表〕（計 3 件）

① 松下正和、荒ぶる女神～猪名川の氾濫伝承、猪名川町公民館講座リバグレス、2009 年 5 月 31 日、猪名川町公民館（兵庫県猪名川町）

② 松下正和、風土記の歳時記～古代播磨の農事暦、龍野史談会、2009 年 2 月 22 日、霞城館・矢野勘治記念館（兵庫県たつの市）、

③ 松下正和、『播磨国風土記』から見る古代の但馬、但馬史研究会、2007 年 11 月 18 日、但馬文教府（兵庫県豊岡市）、

〔図書〕（計 5 件）

① 松下正和、他、神戸市、新修神戸市史歴史

編Ⅱ 古代・中世（共著）、2010、pp.194～227, 868～880

② 松下正和、神戸大学大学院人文学研究科、科学研究費補助金若手研究（B）科研成果報告書① 日本古代のモニュメント空間分析による地域社会と歴史認識の形成過程に関する研究、2009、pp.1～33

③ 松下正和・河野未央編、岩田書院、水損史料を救う風水害からの歴史資料保全（共著）、2009、pp.1～156

④ 松下正和、他、香寺町、香寺町史村の歴史通史資料編（共著）、2009、p.76, 81, 84, 85, 87, 88～90

⑤ 松下正和、他、加西市、加西市史 第一巻 本編Ⅰ 考古・古代・中世（共著）、2008、pp.150～165、253～260

〔その他〕

ホームページ等

<http://kaken.nii.ac.jp/ja/p/19720168>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松下 正和 (MATSUSHITA MASAKAZU)

神戸大学・大学院人文学研究科・特命講師

研究者番号：70379329